

事例4 第1学年 内容項目：C 公正、公平、社会正義

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| ・「考えを共有」する中で、ねらいとする道徳的価値への動機付けを図る導入 | ・一つの物事を、多面的に捉えさせる発問 |
| ・一つの立場（傍観者）を中心にして、多面的・多角的に考えさせる発問 | ・本時の主題（テーマ）からいじめについて考えさせる発問 |
| ・話し合いにおける座席の工夫 | ・教師の失敗体験に基づく説話 |

1 主題名 公正、公平でいるためにできること

2 ねらい いじめ問題に対する作者の考え方について話し合うことを通して、正義を愛し、いじめの解消に努め、差別や偏見のないよりよい社会の実現を目指そうとする態度を育てる。

教材名 「いじめっ子の気持ち」（出典：「新しい道徳1」東京書籍）

3 主題設定の理由

(1) ねらいや指導内容について

本時は、内容項目「正義と公平さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。」に関するものである。これは、小学校第5学年及び第6学年の「誰に対しても差別をすることや偏見をもつことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現を努めること。」を受けたものである。

中学校の段階でも、入学から間もない時期には、自己中心的な考え方や偏った見方をしてしまい、他者に対して不公平な態度をとる場合がある。また、周囲で不公平があっても、多数の意見に同調したり傍観したりするだけで、制止することができないこともある。そのため、いじめや不正な行動等が起きても、勇気を出して止めることに消極的になってしまうことがある。そうした自分の弱さに向き合い、同調圧力に流されないで必要に応じ自分の意志を強くもったり、学校や関係機関に助けを求めたりすることに躊躇しないなど、それを克服して、正義と公正を実現するために力を合わせて努力することが大切である。

指導に当たっては、まず、自己中心的な考え方から脱却して、公のことに自分のこととの関わりや社会の中における自分の立場に目を向け、社会をよりよくしていこうとする態度を育てたい。

(2) これまでの学習状況及び生徒の実態について

本学級の生徒は、複数の単学級の小学校から集まった生徒たちである。そのため、初めは小学校毎の結び付きが強かったり、小学校毎の文化の違いから戸惑ったりすることがあった。日々の生活の中で話し合いながらそれぞれの違いを受け入れてきた。

道徳科では、「席替え」という教材を使って、公平さを重んじることの大切さを理解し、公正、公平な行動を心がけようとする意欲を高めることをねらいとした授業を行った。しかし、実際に公平さを欠く場面に出くわしたときに、それを許さない断固とした姿勢をもつことや力を合わせて差別や偏見をなくすために努力することができない生徒も多い。好き嫌いは感情であるから、全てを解決することはできないが、とらわれないようにすることはできる。自分と同様に他者も尊重し、誰に対しても分け隔てなく公平に接し続けようとする態度を育てたい。

(3) 教材の特質や活用方法について

本教材は、作者のいじめに対する考え、いじめる側の心理や現代のいじめの特徴についての考察を分かりやすく描いている。生徒にとっては、いじめについて客観的に捉えて考えることができる教材となっている。

主に次の場面を基に話し合うことにする。

①「いじめることは、がき大将一人の責任ではない。むしろ、それについていくみんなの責任だ。」と述べている場面。

ここでは、自分自身がいじめをしていなければいいと考えることをどう思うか話し合わせたい。

②「だれかがいじめられているとき、一人でも守ってあげるのが、いちばん強い人だし、いちばん優しい人なのだ。」と述べている場面。

ここでは、強い意志で差別や偏見をなくすことの大切さを話し合わせたい。

以上の理由から、本主題を設定した。

4 学習指導課程

段階	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	・指導上の留意点 ☆評価の視点
導入	<p>1 一般的ないじめについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 人をいじめてしまう人は、なぜいじめをしてしまうのでしょうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分より弱い人間をつくりたいから。 特に理由はなく楽しいと感じるから。 自分と違うという理由から。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめに対して自分なりの考えをもたせ、ねらいとする道徳的価値への動機付けを図る。
<p>「考えを共有」する中で、ねらいとする道徳的価値への動機付けを図る導入</p>			
<p>T：人をいじめてしまう人は、なぜそうしてしまうと思いますか。まずは個人で考えてみましょう。</p> <p>T：次に、隣の人と意見交換しましょう。</p> <p>T：教えてください。発表を聞く時は、聞く姿勢をしっかりとしましょう。</p> <p>T：なぜ、人をいじめてしまうと思いますか。</p> <p>S：暴力とか暴言とかに抵抗がないから。</p> <p>S：自分もやられたことがあって違う人に八つ当たりしているから。</p> <p>S：自分より弱い人をいじめてストレスを発散している。</p> <p>T：自分より強い人にはしないのに、弱い人にはするのですか。それはどうしてなのでしょう。</p> <p>S：強い人だと思われたいから。</p> <div data-bbox="874 864 1398 1021" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-left: 20px;"> <p>発表を聞く時には、聞く姿勢に対しての声かけを徹底して話合いとの切り換えを意識させた。</p> </div>			
<p>教材「いじめっ子の気持ち」で述べられている、作者のいじめに対する考えを導入で押さえておく。</p> <ul style="list-style-type: none"> 戦後の日本では、進歩と引き換えに「人間の画一化」ということが起こってしまった。⇒他人との違いを受け入れず、認めようとせず、仲間はずれにすること。 自分に自信のない人間が、自分と違う者を笑い、自分のつらさや劣等感を忘れようとする。 強い者からいじめられたとき、それに反発する力がなく、自分よりも弱い者に溜まった鬱憤を向けている。 			
展開	<p>2 教材「いじめっ子の気持ち」を聞き、話し合う。</p> <p>(1)「いじめ」は「みんなの責任」と言っているが、それはなぜだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> いじめる人がもちろん一番よくないが、それを楽しんでいる人がいたら、その人にも責任がある。 周りで見ている人も、止めることができなければ、一緒にやっているのと同じだから。 	<ul style="list-style-type: none"> 作者の考えや条件・状況を整理する。 いじめられる人は可哀想だという感情に終始するのではなく、いじめる側の気持ちも自分ごととして考えさせる。 傍観者という立場があるということ考え、いじめという事柄の構造を理解させる。

・誰かのせいだと思っていたら、みんなが人のせいにして、いじめがなくならないと思うから。

一つの物事を、多面的に捉えさせる発問

T : いじめは「みんなの責任」という言葉ができました。なぜそう言っているのでしょうか。

T : ○○さんはどうでしょうか。

S : 最初に止めておけばよかったのに、最初に止めなかったことで最後まで止められなくなってしまったことがあるから、そういう人の責任でもある。

T : □□くんは今の意見どう思いますか。

ある生徒が出した意見を他の生徒に問い返すことで、他者の意見も大切にしながら考えさせることができた。

S : そのとおりだなと思う。いじめている人数が少なければまだ止めることができると思うけれど、人数が多くなれば多くなるほど止めるのは難しくなると思う。

T : なるほど、最初にいじめを発見した人が止められたらなって思うということですね。

T : △△さんはどんな意見ですか。

S : 直接いじめている人はもちろんだけど、いじめを止めようとしていない人とか、見ているだけの人も、いじめている側に入ってしまったと思う。

T : そういう立場の人を何というのでしょうか。

S : 傍観者。

T : そうです。よく知っていますね。今日、考えたいのはその視点です。

<補助発問>

「みんな」とはだれのことだろうか。

(2)いじめ側、いじめられる側、そして傍観者の関係について、傍観者の視点を中心にして考えてみよう。

【いじめ側からみた】
⇒傍観者

【いじめられる側からみた】
⇒傍観者

【傍観者の側からみた】
⇒いじめ側

・いじめる人だけでなく、周りで見ている傍観者。

・周りが何にも言わないから、自分のやっていることは正しいのだ。
・自分のやっていることに何か文句があるのか。

・見ているだけで、どうして助けてくれないのだ。助けてよ。これは普通のことなの。

・ばかなことやっているな。
・ひどいことをしている。
・なぜいじめるのか。

・必要であれば補助発問を活用していく。

・傍観者が何も言わないことにより、自分の言動が周りから承認されているような気持ちになる可能性があることを押さえる。

・見て見ぬ振りをされることで、いじめ側に加担しているように感じる可能性があることを押さえる。

・いじめはよくないと思っていても、自分もいじめられることを恐れて動けない気持ちを押さえる。
・それぞれの立場から見た考えを整理しやすくするため、ワークシー

⇒いじめられる側

- ・可哀想だけど、助けたら次は、自分がやられるかもしれない。
- ・自分には関係ないことだ。何か言ったら今度は自分がやられる。
- ・どうして「やめる」と言わないのだろう。嫌じゃないのかな。

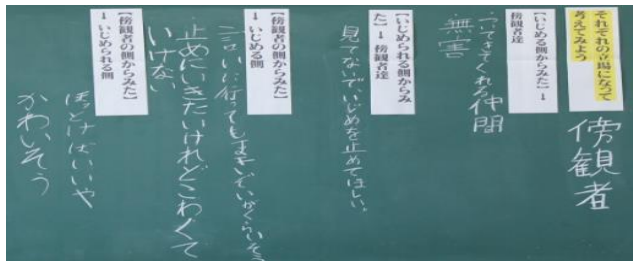
トを用いる。
☆いじめる側やいじめられる側だけでなく、周りで見ている傍観者の立場になっていじめの問題を考えようとしている。

一つの立場（傍観者）を中心にして、多面的・多角的に考えさせる発問

T：いじめを目にしたとき、いじめる側になる可能性、いじめられる側になる可能性よりも、傍観者になってしまう可能性の方が高いのではないのでしょうか。

T：いじている人やいじめられている人は、傍観者をどう思っているのでしょうか。また反対に、傍観者は、いじている人やいじめられている人をどう思っているのでしょうか。それぞれワークシートに記入しましょう。

机間指導をしながら、生徒を指名し、黒板に書いてもらった。



考えをまとめきれない生徒には、黒板に書いてある考えを参考にさせた。

T：ではまず、いじている人は、傍観者のことをどう思っているのでしょうか。

【いじめる側からみた】⇒傍観者

S：黙っているのだから自分の仲間だ。

S：無害だ。

S：先生に言われなかな？

T：これらの意見に共感できますか？

T：いじめる側から見た傍観者の存在って、いじめる側を安心させているのかもしれないですね。

傍観者がいじめる側に何も言わないことで、いじめる側が承認されているような気持ちになる可能性があることを押さえた。

【いじめられる側からみた】⇒傍観者

S：見ていないでいじめを止めてほしい。

S：助けてほしい。

T：そういう気持ちなのかもしれませんね。もしかしたら、いじめる側の仲間だと思っているかもしれないですね。

傍観者が見て見ぬ振りをするすることで、いじめる側に加担している可能性があることを押さえた。

【傍観者の側からみた】⇒いじめる側

S：ひどいことをするな。

S：言いにいっても巻き添えを食らいそうだ。

S：止めに行きたいけど怖くていけない。

S：自分ではなくてよかった。

T：いじめはよくないと思っても、自分もいじめられることを恐れて動けなくなることもあるかもしれないですね。

いじめはよくないと思っても、傍観者である自分がいじめられることを恐れて、動けない気持ちを押さえた。

【傍観者の側からみた】⇒いじめられる側

S：可哀想だな。

S：自分には関係ない。

T：この意見に共感できますか。みんなの顔をみると、違う意見もありそうですね。

T：傍観者という立場を中心にいろいろな方向から考えてもらいました。

<補助発問>

傍観者の立場をどう思うだろうか。

(3)もし自分が傍観者の立場になってしまったら、どのようにしていくことが必要だろうか。(中心発問)

- ・卑怯だと思う。
- ・そういう場面があったら自分もそうになってしまうかもしれない。
- ・傍観者がいることで、いじめる側も安心してしまい、いじめがなくならないのだと思う。

- ・周りにいる自分が何もしないことは、状況を悪化させることがあると考えて行動すること。
- ・自分との違いを認め、一人一人の存在を大切にしていくこと。

- ・ここまで考えたことを踏まえて、改めて自分との関わりで「いじめ」について考えさせる。
- ・個人で考えさせた後に、小グループで話し合い、班ごとに発表をさせる。
- ・班で意見をまとめて発表することが目的にならないように配慮する。

本時の主題 (テーマ) からいじめについて考えさせる発問

T : さて、今日のテーマは、「公正・公平のためにできること」でしたね。

中心発問の前に主題 (テーマ) を確認することで、よりねらいに迫れるようにした。

T : いじめる側が公正・公平でないことは分かりますが、傍観者はどうでしょうか。傍観者になっても仕方ないのでしょうか。それとも、ならないようにするべきなのでしょうか。

T : 「もし自分が傍観者の立場になってしまったら、どのようにしていくことが必要でしょうか。」 今日はこの問いの答えを、一人一人が見つけてほしいと思います。

個人で考えさせた後に、小グループにし、話し合わせ、班ごとに発表をさせた。

T : グループで話し合ったことを発表してください。

S : みんな平等に接するようにする。

T : 平等とはどういうことなのでしょう。

考えを深めるための「問い返し」

S : いじめている人が恐くて、いじめられている人に関わらないようにするのではなく、普通に接するようにすること。

T : そうですか。いじめている人を恐がって、いじめられている人に関わらないようにするのは、平等でないということですね。

S : 両方の立場を考えて、できるだけ弱い立場の方に寄り添ってあげる。

T : 弱い立場の方に寄り添うのですね。でも、みんなが弱い立場の人に寄り添ったら強い立場の人が今度は一人になるかもしれないですよ。そうしたらどうしますか。

考えを深めるために、別の視点を与える「問い返し」

S : それはいじめの対象が変わっただけになるから、そうならないよう考えたいです。

T : そうですね。弱い立場の人を守るという気持ちはとても大切ですね。それと同じくらい状況を見て、落ち着いて公平に接していくことも必要ということでしょうか。

S : 自分に自信をもって注意することが大事だと思う。

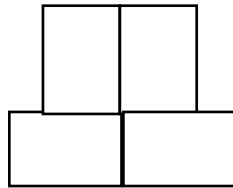
T : 傍観者にはならないぞということですね。

S : 見ているだけでなく助けてあげる。一人でだめなら多くの人で助けてあげる。

T : 助けてあげたいと思っているのは、自分一人だけではないはずですね。そういう風にして、視野を広くできるといいかもしれないですね。

話し合いにおける座席の工夫

4人班の形態を下のようになることで、生徒同士の顔と顔が近くなり、話し合いがしやすくなる。



4 自己を見つめる。

・差別や偏見のない社会にするためにはどのような態度が必要か、自分の経験を踏まえて考えよう。

・人をいじめるような弱い人間にならない。
・人がいじめられている場面に出くわしたら、勇気をもって自分にできることをする。

・書く活動を取り入れ、じっくりと自分を見つめ、これからの自分の生き方について考えが深まるようにする。
☆差別や偏見のないよりよい社会の実現を目指すために自分自身にできることを考えている。

自分を中心に行動していくのではなく相手のことが大切。大事にしている前に行動力をかきつけていくようにする。

いじめを止める関係性について考え、差別や偏見のない社会にするために全ての人に平等、公平に接することや大切だと思いました。また、いじめている人を見たら、勇気を出して止めようか、良いと思いました。

終末

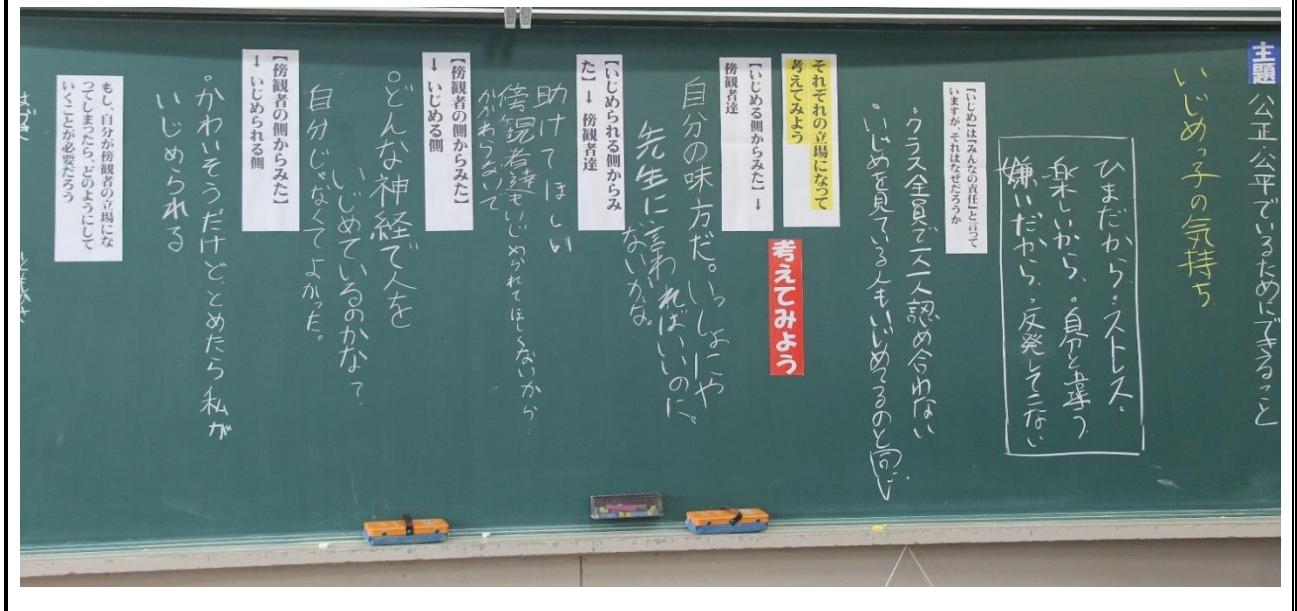
5 教師の話聞く。

・教師の過去の失敗談等を通して、その失敗から今考えるようになったことなど伝える。そして、差別や偏見のない、よりよい社会の実現を目指すことは、一人ひとりの行動が大切であることを考えさせたい。

教師の失敗体験に基づく説話

先生が小学5年生だった時の話です。クラスのある子は、周りから何となく避けられていました。自分はどうしていいかわからずに普通にその子と接していました。しかし、周りがある子を避けるのを見ているうちに、徐々に自分もそうしなければいけないと思えるようになり。そして、自分もその子を避けるようになってしまいました。全く公正公平ではないです。それから小学校を卒業して、その子とは別の中学校になりました。そして、中学校も卒業して高校生になって、その子がコンビニでアルバイトをしているのを見かけました。でも、自分はその子に声をかけることができませんでした。小学校の時のことを思い出して、後ろめたさを感じてしまったからです。これからもその子のことを考えることがあれば、その後ろめたい気持ちを思い出さずでしょう。公正公平でいるのは、頭で考えることよりも難しいことだと思います。だけど、できなければいけないことでもあると思います。みんなはどう思いますか。

本時の板書



5 他の教育活動との関連

事前指導	人権学習として、同和問題などの差別につながる事柄について学習を行う。
国語	「ベンチ」 歴史的事実を背景にして描かれた物語を通して、公正・公平について考える。
特別の教科 道徳	教材名 「いじめっ子の気持ち」 いじめ問題に対する作者の考え方について話し合い、正義を愛し、いじめの解消に努め、差別や偏見のないよりよい社会の実現を目指そうとする意欲を高める。
事後指導	本時の授業での振り返りを「道徳コーナー」に掲示し、生徒同士で他者の意見に触れる場面をつくる。
家庭との連携	授業の振り返りを道徳学年通信に掲載し、家庭でも本時の学習について話ができるようにする。

6 評価の視点

【物事を多面的・多角的に考えている様子】

- ・いじめの問題を、いじめる側、いじめられる側、傍観者の立場から捉えて考えている。

【道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めている様子】

- ・誰に対しても公正・公平に接し、差別や偏見のないよりよい社会を実現することについて、自分との関わりで考えている。

7 考察

(1) 道徳科の目標に示された学習活動

①多面的・多角的に考える学習について

本教材は、今日社会問題になっている「いじめ」を扱ったものである。そういった背景もあり、いじめをすることは絶対にしてはいけないことであるという前提で話を進めた。その中で、いじめの構造で取り上げられる三つの立場、「いじめる側」、「いじめられる側」、「傍観者」のうち、「傍観者」の立場に焦点を当てた。「いじめる側」と「いじめられる側」の立場から見える傍観者、傍観者側から見る「いじめる側」と「いじめられる側」を考えるようにした。「立場が違えば、感じ方が変わること気付いた。」という生徒の振り返りの記述から、多くの立場で考えることにより、自分の考えを深められたと感じている。

②自分との関わりで考える学習について

「もし、自分が傍観者の立場になってしまったときにどうするか」を問い、考えさせた。また、自己を見つめる場面において、「差別や偏見のない社会にするためには、どのような態度が必要

だろうか。自分の経験を踏まえて書いてみよう。」と問いかけ、公正・公平について、自分との関わりを意識させながら考えを深めた。生徒の記述に、「頭で思っただけでも実際に行動できなかったことがあった。そういう場面があったら勇気をもって行動したい。」とこれまでの自分を顧み、今後の生き方を考える姿が見られた。

(2) 視点☆に基づく本時の評価

【物事を多面的・多角的に考えている様子】

☆いじめる側やいじめられる側だけでなく、周りで見ている傍観者の立場になっていじめの問題を考えようとしている。

自分の考えをワークシートに書く場面において、自分の言葉で記述している様子から評価を行った。自分の考えが浮かばない場合も、友達の意見を参考にして自分の意見を記述する生徒の様子が見られた。

【道徳的価値についての理解を自分との関わりで深めている様子】

☆差別や偏見のないよりよい社会の実現を目指すために自分自身にできることを考えている。

自己を見つめ振り返る場面で、振り返りシートへの記述から評価を行った。「実際に傍観者の立場になったら行動に表すことは難しいことであると思うが、自分にできる行動をしたい」という記述が多く見られた。

(3) その他

本時の教材は「いじめ」を扱ったものである。当然、中学校入学以前の実体験をもとに考える生徒がいることを想定した。このことから、導入時の発問では「いじめ」が起きてしまうときのことを、一般的な視点で考えさせるように配慮した。また、生徒の意見で前向きな意見が挙がった時には、特に「実際の場面だったら行動できるかな？」と生徒の心に揺さ振りをかけ、自分の考えを深く考えさせる授業展開にした。